

無

冠

隱口の

泊瀬の山の

山の傍に

いよふ雲は

妹にかもあらむ

の

恋

歌

柿本人麻呂

末田重幸

211709

植木人麻呂

無冠の恋歌

永田重幸

講談社

著者略歴

1926年広島市生まれ。広島高等師範学校卒業。

広島県立広島国泰寺高等学校教諭を退官後、

現在、万葉研究に専念。

詩誌「火皿」同人として、「大鳥の羽易の山に」

「柿本人麻呂の生涯」(その一・二)

などの論文があり、

著書に、『秘められた挽歌——柿本人麻呂と高市

皇子』(講談社)、

詩集に、『かいつぶり』(書肆季節社)がある。

柿本人麻呂——無冠の恋歌

定価 1400 円

昭和55年3月20日 第1刷発行



著 者 末 田 重 幸

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京 8-3930

印 刷 所 慶昌堂印刷株式会社

製 本 所 株式会社 黒 岩 大 光 堂

© Shigeyuki Sueda 1980

Printed in Japan

0021-150899-2253(0)

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

(学1)

はじめに

本書は柿本人麻呂の生涯のなかで、〈在京無冠〉篇とよぶことができるものである。さきに、〈在京官人〉篇として書いた『秘められた挽歌』の続篇にあたる。

この篇で論述しようとする主な内容はつぎの二点である。

一 人麻呂の失官

二 人麻呂の恋のロマンスと妻の死

この篇にふくまれる事柄は、おもに、六九六年七月のクーデターで高市政権が倒れてから、七〇二年冬、人麻呂が京を離れるまでの七年間の出来事である。

この二つの主題に対応して、この時期の人麻呂の境遇を端的に物語るとみられる歌が二首ある。『万葉集』卷三より、

天皇いかづちのを雷いかづち 岳いづまに御遊しし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

二三五 皇は神にしませば天雲の雷の上にいはりせるかも

ひぢかたのをとめ
土形娘子を泊瀬の山に火葬りし時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首

四二八 隠口こもりぐちの泊瀬はつせの山の山の際まにいさよふ雲は妹にかもあらむ

人麻呂のこの二首の歌が成立するそれぞれの特殊な事情と、特別な性格を捉とらえることによって、端的に、へ人麻呂の失官と恋のロマンス」という秘められた生涯に立ち入ろうというわけである。すでに千年来「歌聖」と仰がれ、親しまれてきた人麻呂の生涯を書くことが、こんなにもむずかしいのは、歌の世界で占める存在の大きさに比して、いかにも不自然に過ぎると言わねばならない。これも、数世紀にわたる「禁書」政策のなせるわざであり、確かな文献・記録が湮滅いんめつ、埋没されてしまった現状では、不充分でも、その周辺に散らばるいくばくかの断片を寄せ集めて考察するほかはない。

こんな事情から、人麻呂の伝記を書くのは、ちょうど、壊れた土器の発掘復元の作業に似るとも言える。ばらばらになった断片を、正しくどこに位置づけるかは、その破片がもつ特性によるほかはない。その際、故意に原形を失わせる意図（禁書）で壊されていたら、その復元は容易ではないだろう。

こんなばあい、一片の資料のみで全体の形を決定づけるわけにはいかない。それぞれの断片資料の特性をみだし、それらがおのずから繋つながりを得て、全体像を再構成していくのを俟まちつほかはない。

できるだけ多くの資料の内的関連のみが、全体像を蘇^{よみがえ}らせうる。だから、個々の資料の正確なへ特性をみいだすことが、復元を可能にするかぎであると言える。へ全体が部分を判断し、部分が全体を決定づける。こんな関係として抽出できる。これは一般的なへ模索の構造であり、過程である。

これが人麻呂のばあいであれば、『万葉集』の数百首におよぶ厩^{ぼうだい}大なへ残片資料があるわけで、人麻呂の生涯像の復元は充分可能はずである。

そのうち、ユニークな卷十三を例にとってみる。この巻は他の巻にくらべ、際立って長歌が多い。しかも、作者をほとんど記さない。その点を、これについて長歌の多い卷六・卷三と比較してみる。

卷数	長歌の作者名		
	明記する	伝える	記さない(うち個人歌集)
卷三	21	0	2 (1)高橋虫麻呂
卷六	16	1	10 (6)田辺福麻呂
卷十三	0	2	64 (2)柿本人麻呂
			計
			23
			27
			66

(『新訓万葉集』各巻一覧を参照)

この巻で注目されるのは、人麻呂作の高市皇子の挽歌とみなされる歌群（三三二四―八）がふくまれる点である。この歌群にはむろん作者を記さない。人麻呂歌集の付記もない。にもかかわらず、あきらかに人麻呂の作歌とみなしうる（この点は前著で詳論した）。

この事実は挽歌にとどまらず、他の雑歌・相聞・問答の部にもおなじく、人麻呂の歌、あるいは人麻呂に関係のある歌がふくまれる可能性を示す。これは卷十三の歌の解釈に新たな見地をもたらす事実である。そして、この事実が卷十三に限られないとなれば、他の巻にもおなじことが起こりうる。そうすれば、人麻呂の作品の幅がさらにひろがるわけで、『万葉集』の成立や歌の解釈に新たな問題を提起することになる。

このことは『万葉集』の編集上の原則に関わりが深い問題である。

万葉編集の基本原則と言えるものに、まず二十巻の「へ巻分け」があげられる。その各巻には多くのばあい、つぎの二原則が適用される。

年代順の配列

部類別（部立）

このうち、年代順の配列は歌の解釈のうえでもっとも重要な意味がある。だが、かならずしも厳密に貫かれてはいない。このあいまいさのため、作品の歴史的位置づけが明確にできない憾みがある。このことは、巻分けが二十巻にわたることと絡み、作者と作品の位置づけをいっそう困難にする。

また、作品に表題を付し、作者名を記し、あるいは、左注を追記するなど、ずいぶん念入な編集意図がみえる。そうかと思えば、他方では、それらを一部、あるいは全部省略したりする。前表の数字もその反映である。いかにもつかみどころのない編集ぶりである。

ところが、こんな一見雑然とした編集のなかに、つい見落としがちな原則がきびしく貫かれていたりして、はっと思わせることがある。

たとえば、前掲の土形娘子ひじかたのおとめの火葬を歌う人麻呂の歌のなかにつぎの関係が示される。

〈妹Ⅱ土形娘子〉（妹は妻、ときには恋人の意）

人麻呂がその作品に妻の名を明記して歌うばあいは、万葉広しと言えどほかにない。この重要事についての、こんな明確な証言は、ただへ一度だけこの一首で示される。

〈人麻呂の妻（隠り妻）は女官土形娘子である〉。

この事実は、人麻呂の生涯の解明、とりわけ、恋のロマンスの展開にとって、願ってもない強力な、具体的な材料である。

さらに一つ、作者である人麻呂自身について言えば、つぎの原則がきびしく貫かれる。

〈柿本朝臣人麻呂〉の……

この表記にあたって、朝臣の姓をけっして省略しない。この表記法はじつに厳密に守られる。これは、柿本人麻呂という人物の歴史的・社会的存在を証明する〈戸籍〉にひとしい。

この事実にはつぎの事柄がふくまれる。

(一) 人麻呂が柿本^{うじのかみ}氏の氏上であること

(二) 柿本人麻呂なる人物は一人しか実在しないこと

(三) 『紀・統紀』に記す柿本朝臣^{さる}媛（佐留）と同一人物であること
語らずして示される重要な史実である。

このように、『万葉集』の一見雑然とした姿の陰には、まだほかにも気づかれない重要な原則が息づいていると思われる。そこに万葉編者の秘められた意図が感じられもする。

これからみる官人柿本人麻呂と女官土形娘子という、史上稀^{まれ}にみる艶^{あで}やかな恋のロマンスに生きた男女の存在は、こうして、『万葉集』という、鬱蒼^{うつそう}たる昼なお昏^{くら}い大歌林のなかで、秘めやかに、だが、鮮やかな大輪で花開く野花の強さで生きつつづけてきたのである。

目次

はじめに

I

第一章 雷岳

15

一 大君は神にしませば 16

二 三諸の神の形を見る 24

三 三諸岳、雷岳、神岳 29

四 雷の上に 33

第二章 無冠の歌人

41

一 狛路池に遊ぶ 42

二 立太子問題のあとに 49

三 輕宮訪問 56

四 羈^た旅に出る 66

五 御食つ国・淡路の野島 72

- 六 雪の日の招宴 87
- 七 死の悲傷を歌う 94
- 八 香具山に屍を見て 103

第三章 明日香皇女

- 一 持統天皇と明日香皇女 114
- 二 木麴の殯宮の時 120
- 三 宜しき君・忍壁皇子 134
- 四 中尾山古墳と安古山陵 141

第四章 人麻呂の妻

- 一 出雲娘子の溺死 150
- 二 隠り妻土形娘子 161
- 三 天飛ぶや軽の路 169
- 四 人麻呂と土形娘子の邂逅 177
- 五 甘樫丘の麓で 184
- 六 心さへ消え失せたれや 196

第五章 輕の里の歌のサロン

207

一 輕の曲峽 208

二 輕の里へ通う 217

三 わが家すらを旅宿のごとく 226

四 つつじ花香にほえをとめ 240

五 ある冬の日 246

六 京の政情 250

第六章 紀伊行幸と人麻呂

257

一 紀伊潜行 258

二 黒牛瀉 273

三 み熊野の浦 284

四 風莫の浜 290

五 藤白の坂 296

六 紀ノ川のほとり 301

七 天雲の下なる人は妾のみかも

311

八 われ故に言はれし妹 323

第七章 人麻呂と家の妻 331

一 世間を背きし得ねば 332

二 紀伊行前夜の問答 340

三 物言はず来て 347

第八章 在京人麻呂の終章 355

一 虚脱から追慕へ 356

二 土形娘子への追慕 363

三 三たび紀伊路へ 374

四 玉津島 385

五 近江国赴任 391

あとがき 395

参考文献 399

装幀

市川英夫

柿本人麻呂——無冠の恋歌

